

## バングラデシュ都市住民の生活特性と衛生意識

萩原良巳・酒井 彰・萩原清子・山村尊房・Bilqis Amin Hoque  
畠山満則・神谷大介・福島陽介

### 1.はじめに

開発途上国において、衛生サービスにアクセスできない人口は30億人に達するといわれ、2002年に開催されたWorld Summit on Sustainable Development (WSSD)では、この衛生へアクセスできない人口を半減することを目標として採択した。バングラデシュはアジアにおける最貧国のひとつであり、全人口の36%が1日1USS以下の生活を強いられ、Human Development Indexは175か国中139位にランクされている。

衛生的なトイレの普及に関しては、従来政府が普及を進めるpit latrineというタイプのトイレを使用しているかどうかで統計が取られてきた。しかし、このタイプのトイレは、管理状態によっては必ずしも衛生的ではなく、2003年のバングラデシュ政府の調査において、トイレ使用の実態が衛生的か否かで判定されたところでは、国民の43%はトイレを持たず、衛生的なトイレの使用者は32%に過ぎないという結果となっている。さらに、pit latrineは、地下部分にし尿を溜め込むものであり、習慣的にし尿の引き抜きが行われていないことの多いこの国では、継続的に使用できるものとはいえない。

開発途上国の住民が主体的にトイレ、し尿処理など衛生を改善していくためには、住民が受け入れ可能な技術と導入の方法論を明らかにする必要がある。本稿では、適正技術及び導入の方法論を開発するための基礎資料を得る目的で、住民への直接インタビュー形式により、バングラデシュ都市住民がトイレ、し尿処理、ならびにこれらを含めた衛生、生活全般についてどのような意識を持っているのかを調査した。

### 2.調査の概要

調査は、2003年8月末より11月にかけて、首都Dhaka西方約35km、車で1時間程度の距離にあるManikganj Sub-districtの2つの地区で行った。両地区は同名のDistrict(県)の中心地域に

位置し都市化しているが、1地区(Ward 1)は水田に囲まれ、農村的生活が残されている。また、もうひとつの地区(Ward 7)と比べて貧しい人の居住する地区となっている。

調査項目は、回答者属性(性別、識字、職業、持ち物)、トイレ形式、衛生習慣(手洗いなど)、非衛生と感染症、環境汚染等との関連認知、使用しているトイレの現状評価、し尿取扱いに関する忌避意識、し尿の資源価値の認知、

トイレ・衛生の改善意志(支払い意志:費用及び労力を含む)、し尿資源の利用意識、薬、医療へのアクセス、生活に対する評価(関心事、改善意志、ゆとり、満足度)であり、サンプル数は、Ward 1:111、Ward 7:110である。

### 3.調査結果

調査目的に反映できる結果として、例えば以下のようなが傾向が得られている。

- 所得階層の異なる両地区で識字率、非衛生と感染症等との関連認知、トイレの現状評価、医療等へのアクセス、生活に対する評価で明確な相違が見られた。
- 生活全般、衛生状況を改善したいという意識、ならびにそのための支払い意志は高いが、トイレについては今のまま使い続けてもいいという割合は少なくない。
- し尿に対する忌避意識は大多数の住民にあてはまる意識とはいえない。

### 4.今後の解析予定

住民が衛生状況を改善しようという意識構造、意識形成にかかる要因を明示できるよう、数量化理論、共分散分析等による解析を進める。解析結果から、住民が受け入れ可能な技術に求めている要件と非衛生がもたらす弊害についての認知レベル向上方策など技術導入の方法論に反映できる事項を明らかにしていきたい。